秋空と歌い手

土田かこつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
秋空と歌い手

【Ｎコード】
Ｎ１９７３Ｏ

【作者名】
土田かこつ

【あらすじ】
いつもより少しはなやいだ週末の駅前で、ふと耳にした懐かしいメロディ。
忘れられない歌が呼び起こした想いとは。

午後7時。
久々に早く帰れたと思ったら、ラッシュにあたってしまったらしい。
人ゴミでホームの階段がつまる。なんだかいつもにましてさわがしい。

ああ、今日は金曜か。
世間は週末なのだ。

ふと、ざわついた改札の向こうから懐かしい歌が聞こえてきた。
カラオケ屋の広告画面から流れる電気を通した歌じゃない。
かすれた肉声。
生々しいギターの音。

改札を出てエスカレーターを降りる。
ギターを抱えて歌う男の姿が見えた。
たぶん、まだ若い。

遠い記憶。
忘れそびれたメロディ。
ばかみたいな甘い歌。

ああ、青い毒だ。
はずかしいほど身体にまわる。
腹が立つほど甘い歌。

自分にはもうないはずなのに。
熱ならさめたはずなのに。

夏の火照りもとうに冷えた空気の中で、取り残されたように熱にうかされた青年。
掻き鳴らして。
掻き乱していく。

いらだった。
いらだっていることにいらだっていた。
苦みを飲み込むように顔をあげ、青年をにらみつける。

…と。
一瞬、自分が何を見ているのかわからなくなった。
もう、しかめっつらにはならなかった。
なんで。
なんであの顔がここにあるわけ。

あいつの熱に憧れて。
でも結局、憧れ続けることに疲れて私はやつから離れた。
あれから何年たっただろう。

理解が追いつくとともに笑いがこみあげてくる。
呆れるよりもおかしかった。
あの馬鹿。
いったいいつまで続けるつもりなの。

もう他人事だがら、このまま奴が歌い続けて食い詰めたって知ったことじゃなけれど。

でももう他人事だから、このままずっと歌い続けて湿った熱をまきちらしてくれればいいと。
無責任に想いながら、半開きのギターケースに１００円玉を投げ入れた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1973o/

秋空と歌い手

2010年10月8日23時54分発行